2022年9月11日（日）主日朝礼拝説教

『あなたはどちらの側？』　井上隆晶牧師
サムエル上29章1～5節、マタイ福音書15章21～28節

❶【ペリシテ人の王アキシュに身を寄せるダビデ】

今日は旧約聖書のサムエル記からお話をしましょう。ダビデはサウル王に命を狙われ何度も殺されそうになるのですが、神様はその都度、彼を助けて下さいました。しかしいつも逃げ回っていると、緊張の連続で疲れますよね。そこで彼はイスラエルの敵国であるペリシテ人の国に逃げようと考えます。敵の国までは追いかけてこないだろうと考えたからです。こう書いています。「**ダビデは心に思った。『このままではいつかサウルの手にかかるに違いない。ペリシテの地に逃れるほかない。』**」（サムエル上27：1）そこで彼は家族と、自分に従う600人の兵とその家族を連れて、ガドの王アキシュのもとに身を寄せました。案の定、それを聞いたサウルはもう二度とダビデを追跡しなくなります。
彼はペリシテ人の土地に1年4か月住むことになります。その間ダビデは、自分が完全にイスラエルの敵になったように振舞い、アキシュを信じ込ませるために、イスラエルを襲うように見せかけて、敵の部族を攻めて、その家畜や財産を略ってはアキシュのもとに送りました。そして王には「今日はイスラエルの～町を攻めました」と嘘の報告をしました。アキシュ王はすっかりダビデを信じて、彼は自分の僕になってくれたととても喜んでいました。
しかし、そんな偽りの生活はいつまでも続きません。ペリシテ軍とイスラエル軍が全面戦争をする日がやってきました。ペリシテ軍の武将たちの軍勢が続々と陣に集まってきました。するとアキシュ王のそばにダビデとその兵たちが一緒にいるのを見て驚き、王に尋ねます。「**このヘブライ人らは何者だ。**」（サムエル上29：3）口語訳ですと「**これらのヘブル人はここで何をしているのか**」となっています。
アキシュは武将たちに「彼はイスラエルの王サウルの僕であったダビデだ。彼はサウルのもとから逃亡して私のもとに身を寄せている。今日まで彼は私に忠実に仕えてくれた。」と答えます。しかし武将たちは不安になり言います。「彼がもし、戦いの最中に裏切ったらどうするのか。サウルは千を討ち、ダビデは万を討った、と歌われたダビデではないか。この男は帰らせるべきだ。」そこでアキシュ王は、ダビデに「**主は生きておられる。お前はまっすぐな人間だし、わたしと共に戦いに参加するのを私は喜んでいる。…だが武将たちはお前を好まない。今は、平和に帰ってほしい。**」（サムエル上29：6～7）と願います。ダビデがそれでも食い下がって「私は王と一緒に戦いたい」というと、アキシュ王は「**わたしには分かっている。お前は神の御使いのような良い人間だ。**」（同 29：9）と諭します。そこでダビデは自分たちが寄留している町に帰って行きました。内心、ホッとしたと思います。

ここを読むとアキシュ王がいかにダビデを信頼しているかが分かります。アキシュは「**主は生きておられる**」といって神様を持ち出し、神の前で自分は正直に言うといっているんですね。また「**お前はまっすぐな人間だし**」「**お前は神の御使いのような良い人間だ**」とダビデを褒めますが、これを聞いたダビデはどんな気持ちだったのでしょうかね。ダビデは、自分は神に助けを求めず、敵に助けを求め（神を神としない）、アキシュ王を騙して生きているのです。

❷【ここで何をしているのか】

この武将たちの言葉「**このヘブライ人らは何者だ。**」「**これらのヘブル人はここで何をしているのか**」を聞いた時に、思い出したのがエデンの園で罪を犯した後のアダムへの神の言葉「**どこにいるのか**」（創世記３：９）でした。英語だと「Where are you?」です。神様はペリシテ人の武将の言葉を通し、アキシュ王の「**主は生きておられる**」という言葉を通して、ダビデに語りかけているように思えるのです。「ダビデよ、お前はここで何をしているのか、お前は何者だ？主は生きておられるぞ。」それはダビデだけでなく、今日生きる私たちにも同じように語りかけておられると思います。

●榎本保郎牧師はこう語ります。「神に選ばれたヘブライ人はいつも神の側に生きるべきである。彼らが神に聖別された民であるということは、この世から引き離された民であるということである。…大体、神を信じるキリスト教徒が、世俗的なポーズをとったり、神を信じない人たちの中に入っていったからとて、何ができるのだろうか。…よく日本の社会運動家の先駆者はほとんどキリスト者であったと言われる。ところが、彼らのほとんどは教会にあきたらず、教会から出て行った。…しかし教会を出て行った彼らはどうであったか。今日の社会運動界を見る時、彼らやその流れをくむ者のほとんどはもはやその指導力を失い、ある意味ではこれらの世界からも疎外されているかのように思われる。キリスト者は頑固なまでキリスト者であるところに今日におけるキリスト者の存在の意義がある。」

「聖」というのは「分ける」という意味です。以前、ある別の教会の聖餐式をした時、残ったぶどう酒を、役員さんが元の瓶の中に戻そうとしているのを見て、止めたことがあります。聖別したパンは普通のパンとは違いますし、聖別したぶどう酒は普通のぶどう酒と混ぜてはいけません。それを知らないということは、聖と俗の違いが分からず、そんなものはないと思っているということです。だから何でも人間の力でしようとするのです。どんどん教会が世俗化している証拠です。私たちはイエス様にこの世から選び出され、側に置かれました。それはキリストの物になり、キリストに似た者になり、その香りを持つためです。自分がしっかりキリストの香りを放ってから、この世と交わるなら分かりますが、この世と大して変わらない者が、この世の中に出て行って何を証しできるというのでしょう。どんな影響力があるというのでしょう。先日、朝の祈りで主の祈りを唱えていて思いました。これは主の祈りですから、キリストの祈りです。「われらの父」「われらの日用の糧」「われらの罪」とすべて「われら」となっています。キリス

トは全ての人のために祈ります。この「われら」の中には「敵も、迫害者も、自分が嫌いな人も、カルトの人も」入るのです。この祈りを本気で実践しょうと思ったら、私たちの心がキリストの心に変えられなければなりません。それには聖霊による以外にありません。祈らない者は、敵を愛せず、敵の罪の赦しのためには祈れません。まず、キリストの中にどっぷりと漬かることです。**キリストの力で何かをするのがクリスチャンであって、自分の力で何かをするのは世の人と何ら変わらないではありませんか。共産党でも同じことを語り、行います。塩気を失った塩が捨てられるように、キリストの香りを失ったキリスト教徒は何の役にも立ちません。**「キリスト者は頑固なまでキリスト者であるところに今日におけるキリスト者の存在の意義がある」という言葉は重い言葉だと思います。

❸【食卓から落ちるパン屑～残ったパン屑～に共通するもの】

さて今日の新約聖書の個所で、イエス様は悪霊に苦しむ自分の娘の癒しを求めて叫び続けるカナンの女性を無視し、次に「**私はイスラエルの家…にしか遣わされていない**」「**子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない**」（マタイ 15：24、26）と、二度も拒否する厳しい言葉をいわれます。それでもこの女性は諦めずに「**主よ、ごもっともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。**」（マタイ 15：27）と言ったので、イエス様は彼女の信仰をほめられ、娘を癒されました。この後、四千人に食べ物を与える奇跡の話になりますが、七つのパンと少しの「**小さな魚**」（同 15：34）をイエス様が祝福して増やし、四千人以上の人を満腹させます。ここに「**小さな魚**」とわざわざ書いているのには意味があります。そして「**残ったパン屑**」（同 15：37）を集めると、七つの籠にいっぱいになったといいます。ここにもパン屑が出てきます。この話は実はカナンの女性の話とつながっているのが分かります。

カナンの女性は「パン屑でも十分です」といいました。イエス様の手から落ちたパン屑なら、どんな屑でもそれは人を生かし、癒すことが出来るのです。**四千人以上の人を満腹させ、残ったパン屑はただのパン屑ではありません。イエス様が祝福した、ご聖体のパン屑の山です。祝福されない完全なパンが山ほどあっても、人を満たすことは出来ないでしょう。しかし、祝福されたパンなら、その屑でさえも尊く用いられるのです。**キリストの手にあなたを委ねなさい。キリストの側にいなさい。キリストの手に触れ、祝福してもらいなさい。これが今日の答えです。

都島教会はパン屑のような教会です。その敷地は狭く、とても小さな教会です。でもこの教会が神に祈る教会であるなら、どんなに小さく、無力で、屑のようであってもそこには命と喜びが溢れ、必ず人を癒し、救うことが出来ます。どんなに大きく、豊かで、数が多くても、神に祈らないなら、その教会には命も喜びもありません。キリストは「**私を離れては、あなたがたは何もできない**」（ヨハネ 15：5）と言われました。屑であること、小さいこと、貧しいことを恐れてはなりませ

ん。むしろ恐れなければならないのは、神の側にいないこと、神の力を祈り求めようとしないこと、神から離れても平気であることです。ああ、何という神の力でしょう。何とすばらしいことでしょう。小さい魚とパン屑でさえ用い、生かし、働かれる神は。神よ、私たちと共にいて下さい。私たちも共にいます。この小さい者を用いて救いの業を行ってくださいと祈りましょう。